家農道　上

中村俊定文庫
文庫 18
597

今茲天明三十月十二和友翁三とせの
忌辰に當りて今終程中居和歌の
むつましく枕かみに侍りし翁終焉の物語
を始として其折からの郷友達追悼
の發句ともの いまをあまたい松の葉の
茂まされ草木のうろつも侍りけん
をしと思ひて梓に鏤めし侍る
又後の世に並へおくてきゝてこれの

よろく蕉翁の実を　雑惣して極
つじ口をも急かしらなき飛はいてや
おもひとゞめ浮精舎に塚を築
碑と書せは三日翻空乃ゝ神ゝも
読なりけれと言志寄はつは年
ことよみよりぬ柳和尚母の見る気を
君めるよことも同しく小林の郷田よ
して来地と蕉手分りけし　則

不破のうら子義仲寺て了ふ
一宇と建て又八王子権現及地神
二社とあふぎ権現は宗氏尼は法蔵
乃し和尚和尚寿ともまゝ母まり
和尚号信稱は志村堂標紀石
程中みゐ和尚法歸還今日見而間屋
儀天公　ともいふうちなる二月つき
なかりしの世をふるまいつとめ
蕉雨

に成り竹阿の風をゆかりしと
なとゝいへはあつまりて津の江
戸宗瑞とみるを稱しけるあり江
此要ハ深くとの和らかに太平に
して少年より抱へし俳諧をこゝろ差の
長房や誰に流派に富り流石ハ
白兎園宗瑞門葉の長ならし事
一雪相兼し三世庵あまねくしらしめ以後

是等俳諧居の曽肩書をはなれて門人
となりて勝景にこゝに弟子を教授する
やまるさハ更に句讃を撰るありし其人
ならふに忠孝家業をなんとして
みなはにつまてまあしを痛みにと
説此のたゝ名所に古細書に闘の児の母
ところのいとゝもありし殺因縁瑕に
筐置を見る付ハ前の人を猶さら

是によりて時に学問修行をことゝし

つとめて教を受しては歌よみ文かき

善と悪との心のそゝ多うる志るに

はしめは手本を見ゆる消息せよと

ちらし書きて往来消息を習ふよ

して相生ひ相いちしきれ世のあはれ

いはゆるみちんはこれ弟子の師の恩

師の恩まさる高き事をしるへく

まいらせ候と書きの目録へ

ほんそうして御かる中より家御へ

先ゟまゐらせはよそへの指南にはあし

つねに座をのぞんで追従の言

あしからんとくれ〴〵いましめく

せんと思はゞ学をとりて少壮

にして労力せされは老大必

悲傷せんと先達第二のめをを

是いたく歎をたため額に汗して
叙之惟之云爾

滄澤園美谷敬識

早稻田大學圖書

辭世

程中居 和友

此身欲反娯無底以言
乍来萬物長大覺金言
先生眼、又生夢笑人
即天堂

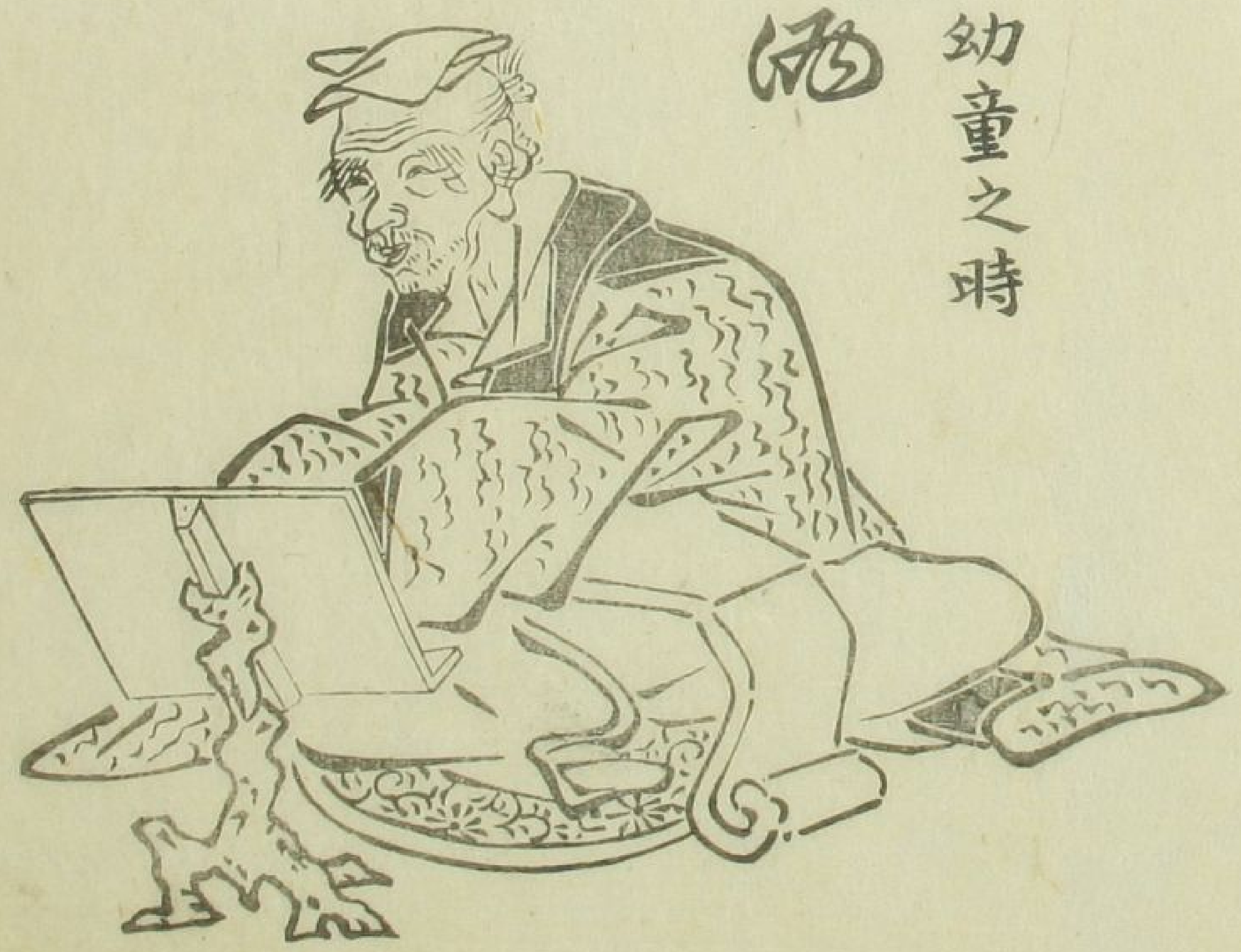
中村俊定文庫

同

野ゝ紅色
雪のこゝして
咲居花

寶歴九己卯年周六幼童之時
謹以遺覺之處拜画

味孚先生像



焼香

蘭堦筵

夢も絶えて暗きに迷ふ霜夜かな　（女）みよ

ゆふつとしよ向ふや庭乃雪佛　（少年）五十郎

澄む月の猶おかけて涙かな　祇川

蓮生や流るゝ身に気なまゝ　光朝

歳剃し菓子も手向て玉河しま　宗仁

（此文岡の清めりのゆかしや紙寄席の跡残徳く後日も営むを拝し給ひて営む）

禅中居後主

思ひ出ぬ恩にちるや手向の水ぞふり　和明

捻香

この家に老たる人に向くの秋なし
惜しさるに残さうけ葉かな

當所連

宝海やそよ板葉れは雪子　米花

物かげの篠に露とはしゆして名残哉　義谷

面白くや思ひし抱き鳴る百むら　左竜

建武りや岸も洞乃露松か　亡人　朝水

月落く来くの淋やおもわら生　旭汲

鵆沢連

まむらるや碑も筆も剃らせん　孤山

最へさ冬し堀さく野邑の雪　雲和

膝り雨子歴れ源さう北送り　伯水

荊澤連

梅山にたたうれ山や花の月　九阿

手綾とりて志知へかけし影れ
飛如さも連し穿た如子とも　白保

そ嶺々うら出ん山けちや雪の笹　花實

津をくやつんる稲やし塚の霜　渭川

ありし世に植し庭の色牡丹　　渭翠

手むけぬる袖もしくれて露の空　　楚雲

大師連

百乃草葉淋しく摘や墓乃花　　二見

墓守も訪け旅寝ばかりてや秋独　　東南

戸田連

亡人

咲やすき花の露ちる末はしの　　紀山

野おくりや出かゝる涙夕しくれ　　乕水

田嶋

惜まれし色も尾花乃霜一夜　　哥好

江原

たのしみに植ておく菊の声ゝ乃　　和定

下宮地連

色かはるも恩の深さよ雪の人　　如梅

香のはに見はたしにそ窓の春　　梧山

亡人

忘れしも手向の色や秋時雨　　文残

小笠原連

、浜鳥の跡さへ深し庭の雪　如蘭

起かゝり洞の和尚かおい花　翡来

ちる花の跡つけ櫻乃長き夢の花　春枝

おかみる里ふさく露出てなかる氷室の梅　玉河

まつかりしの枝も淋しや霜くさ　亡人 秀木

、草の想や語る小春の淋くし　排園 双富

、秋の雲洞く流る起りし人の　山寺 黄鶴

、手向けや落りし紀名を露乃笠　下一之森 和泉

、梢くさへ風雅の詠も聞ゆる花　中野連 呉峰

鳥のまゝ草ちる市に踏しくも飯の雪　如水

、

平岡連

筆の跡にゆがんで洞や初時雨　如雪

うれしさも手向の枝やゝの花　森水

湯沢連

踏分し跡のちらしや山かれ花　和勇

見ん納の香わすれし昌し筆の花　夜霜

塚原

其雛や枝の手向や衆ゝ出毒　李丁

川上

記ゆきの数を添し雪の花　浅巨

落合連

世に出し筆もおのゝかきつらね　呉江

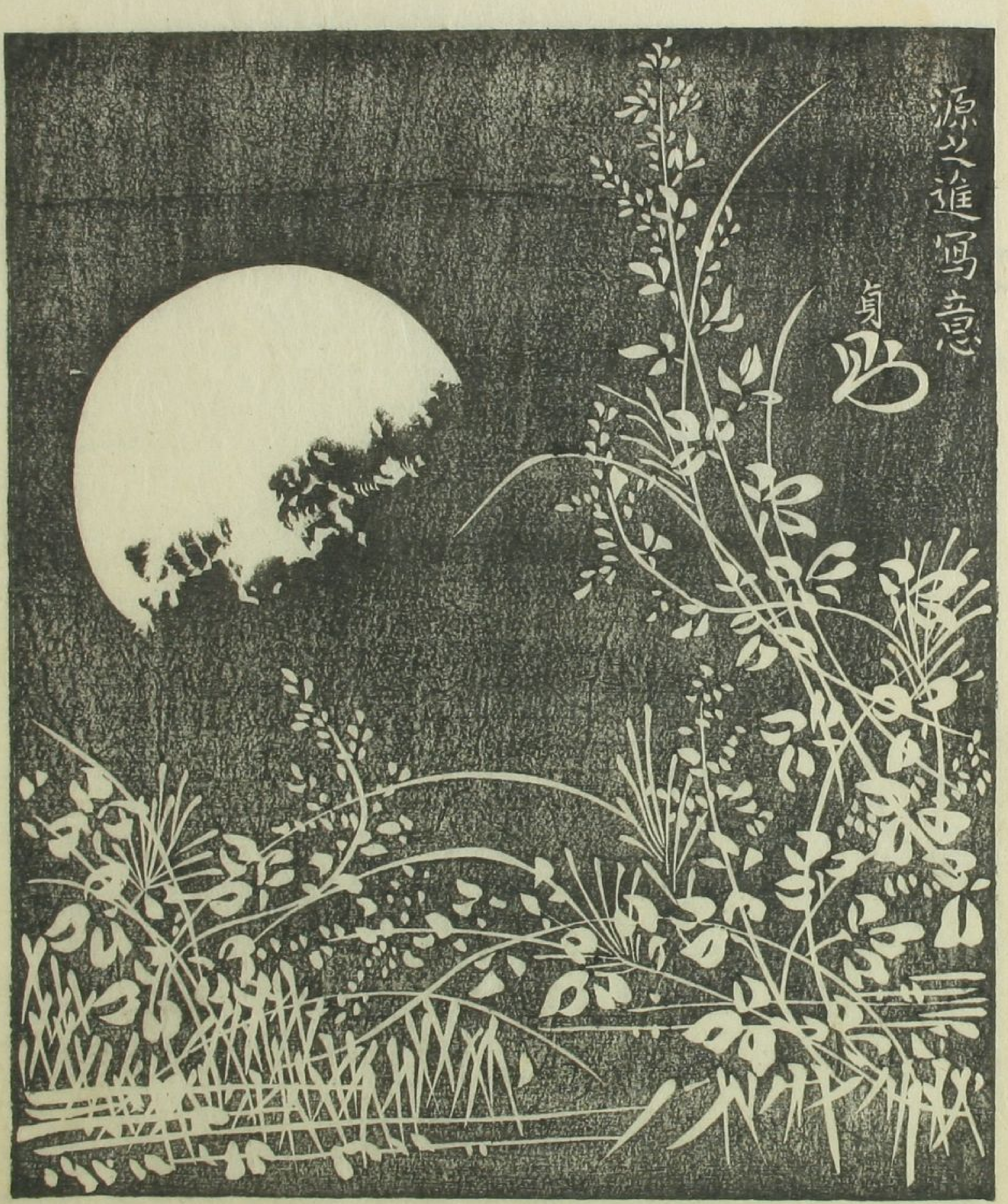
七尺の影を忘れし寒卓姿　新枝

名残おし別る読やや手向の花　周里

丁ゝ雲の鳴や残すゝ文津人　古川

宝毒や庁枝に伽羅の香かをる　依田

傍の筆の巻や雲とみち　水皷



ひの里よ本庵にて
被招れて

小林連

一まむるや舩く手折る露の笠　閑庭

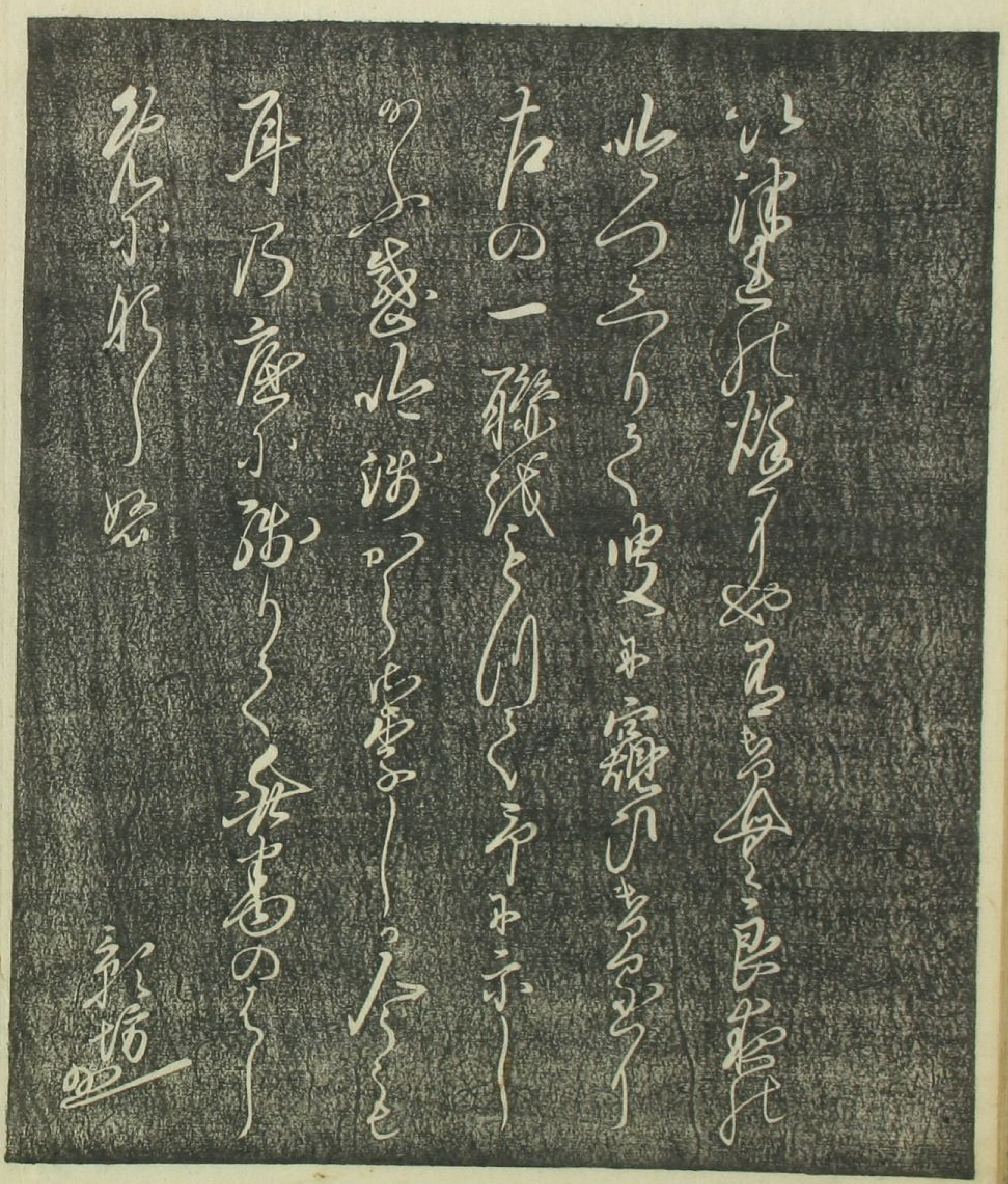
つくろ居せて雀れ形恵や初涼居　竹茂 和遊

飯野連

一雀れ跡に雪に家形ふる一羽　柳烟

この字大き机りけらくや手向草　書来

跡長く続くや小雀れ去年　梅五



以津れ乃始より茶會ゝ良[illegible]れ

此ふうりく叟ニ寵乃ちからり

右の一聯残りを問ひニ示し

めふ盛に諸ばかりを[illegible]しの令も

耳乃座に諸りく茶香のとし

先よ于り婚

新[illegible]

歌仙

名月や轆乃影りふ猿乃こゑ　　和友居士

露にも見るゝ一里の山寺　　金

旅志てし[illegible]武者を嘆きく　　孤山

家ぬめに須弥剃せしかなり　　名積

揃く行諸乃日数も半られす　　スス富

風和らきさく扇僅ふせね　　米花

植付し門田乃緑に栄よく　伯水

何らかもなくおしむ夕空　楚雲

盆過の踊もさらし泥女足　黄鶴

よの中絶て深雪積る家に　如雪

鼻ひるも今や鳴もの不形らん　柳水

擒ぬ恵　毎残かり形へ　朝水

執きこかりふく自乃禹ちらく　如薫

嵩山義ぬかり茶止ミ好む　哥好

一ふ乃舟の舵き再うみ海うせし　亀水

荒布しあらぬ須二人の浦浪　渭翠

風譲ふ鴉鶯ふ玉に水灘も渡　白保

射日長寒寸君残消之　和定

洪恩も皆七郷ぬ一揆ひ　梧山

公事済てかりて豊ふ治る　如梅

跡式ハ二萬孔かうし労しき　翡来

豊ある人立ちての形つ家　玉河

討死やゝ薄く朝しらむ首途そ　書來
世を飽く事もなくてむさき　希烟
鶯聞て入る跡初音れ子規　梅五
眠りもやらぬ私の昭への　閑庭
網にや掛ひし鯉におそはれて　新枝
心乃ゆるむ快氣してから　春枝
下れ白に后の自見ふ伺ひし　巣谷
竹の梢も露に轉ひちて　祇川
萩原に浄土淺きやく拾ひつゝ　周里
何やらん人無書のくなる　言川
波まくなむ西にかけられ手を掛へ　雲和
山しつか障子寛く夕暮　和明
かゝれ行き葉花を如しれ分盤　渭川
さくも堆かむ石乃陽炎　筆

一周忌

叟生涯深浅なりしを
ありし事残さず出ぬ

燗酒とものゝあはれさや一めぐり　白保

面影もまた一と年やちかしくき　蕘谷

めぐり来る日にも隠しなくに袖濡る　孤山

読書乃絶へ人なし渡り鳥　久富

菊枯ぬやちりても匂ふ一周　黄霍

亀之嫁ゑにも驚しや冬の梅　渭川

去れ九日の机ア縁家あらぬ　哥好

手向るや籠て咲嫁の仏堂　和明

三回忌

思ひ出る居士さまに三吉与ん寺　孤山

樒の写小三と数れ影や霜柱　和明

弗枯りく同ちく三と世の悠おもい　歌好

三めぐりれ手向ん梅や雪仏　蕘谷

山茶花や誰に三とせのおもひ咲　白保

七回忌

七遍乃いろはの恩や地らぬ字　和明

あつとせの墓に手向や冬牡丹　哥好

雪見しく語る君なしゆふの暮　紀山

七とせの志しれす嬉しく彼岸　柳木

空や寒や六字七字の手向草　孤山

七とせやよ鳴つくしも鳴ちとり　美谷

おもかけしを我かふかふそ咲
しに棲く手向の雲の七かし　白保

十三回忌

雪しくや十三年乃塚乃前　歌好

手向るや十三絃乃手も凍へ　孤山

雪梨子や手向る数も六七ッ　和明

霜さびし石碑の跡や一昔　白保

手むけ申も花をいふや翁の月　紀山

知もこのけふや雪まろ之来る了人の良　齋木

十七回忌

冬いろく手向ても不白が文字の数　孤山

霜のうへに跡清くろふや若葉霜　和明

知りつくし手向しその霜　白保

二十五遠忌

炉火取乃糖意も香霜押稲り荒切まくまとし五ヽ丸忌日を春として門葉の雅の旅ちもちろく豊茂りしまち碑の墨を書して随涌乃遊意を述のそ

分眼中追し数高し霜達二ノ　和明

み仏や西の忌日の手むけくさ　左竜

志ら露や二十五年のろふなれと　巻谷

焼香乃けふりも露や玉ゝ忌　白保

程高萩咲の石塔や萩乃丈　以富

年浅深く恩のふかまる秋の風　黄霍

元よりも面影宿し墓乃香　花實

二十五年陰積し露の高さや　禾花

石高二十五年の霜凍け　伯水

冬の日影や碑乃面に残りし　雲和

此御人の跡なつかしや冬木立　春枝

二十五年枯れくも偲ふ冬の夢　翡來

めくり来て又袖ぬらす時雨かな　淺原　和碩

此御人乃露庵の空を問ふ　兔水

詣来て眼に水出しや塚の露　五水

冬枯や二十五年の蓬くさ　花仙

めくり来し年回をあけく衛ふ　泉　竹彦

五文字の外にも手向や冬牡丹　釋　圓之

古穂れたひ家たやれし八字　一松

鳥さや埋に照そふ冬の月　一櫻

音添る埋の餘韻や玉霰　呉峰

茶湯にも雑り手向そ霜の宿　如水

散し風もあくに寒や冬の雲　和遊

雪の野やいつと踏ゆ雪の跡　依田

来しとも手向届んちからぐさ　李丁

飾りたる枝折く墓の手向かな　二見

日ゝに照まさる鏡や宿の雪　祇川

雪乃野や石にはなくも名の筆　千里

石刻して名残も枯野も手向艸　孤山

奉追悼

志村和友君　大久保賀観

一自星文散寥然二十年矣名斉海

嶽彩筆若雲烱月照苔碑下風悲杌
樹邊紛ゝ门葉子追遠集餘篇

仝　　同　政敏

天涯葉落魯屈指想幽魂昨施彩毫
德今知青眼恩碑銘成感易流水慈
愁繁唯有屋梁月誰謀積涙痕

仝　　同　政平

招魂欲擬涙難収況復天涯落木秋
此夜山陽聞玉笛月明江水向西流

仝　　同　方副

獨向孤墳嘆古今北風蕭索動寒林
遺篇信口相吟處白雪調高愁轉深

仝　　内田明堯

古廟猶陰映躊躇憶不窮清華揮鳳
羽佳句唱蠶叢五ゝ周旋月一時搖
落風唯聞寒鳥嘯相顧莫先翁

和友大人見古栖作哥
雪積留窓尓伏居而歎友君之万佐
祢婆世武爲使手無美

倉吏中麿

二世　蓮教靈　十三回忌

高よ鳥の初聲鳴や梅さかし　麦谷

同じ塔残夕色にも世に寒気し　免水

碑の前や七尺去て冬の月　谷積

絶ぬる日の聲鳴や空の鐘　義敬

抄る鳴る又袖濡川墓のもと　和明

和靖先人無弦の叟
ありしか無月庵より
頃く無りし此情識あり
出く

古庵寂し　せめて音せよ松の琴

孤幽

跋

抑も無象はなか眼を居士ハ漣池の
門弟子にして俳諧乃志ふかく深く乃ミ尓
しく聞く地ハ雪さえ松乃つゆ
句も詞ハいくも多かる無益を畜
乃志り一尓古ぬ秘蔵よ世有尓中古の
を案閲随みして文て藤津へし筆

志画に小さ志て雪れ志て手すく之置
川口の此梁恩波乃源の於なきあさ
くし紀水茎乃阿とを事尓
於雪の梁

癸卯仲冬　蘂桂道人孤山謹書